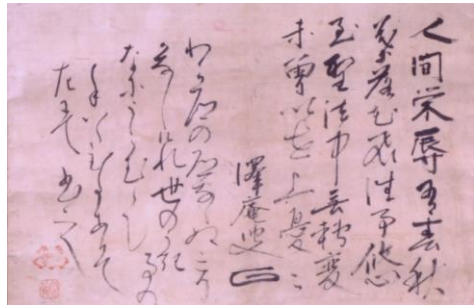
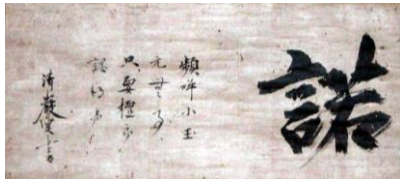


日	曜	ふくやま書道美術館常設展示室・展示室	
1	木	秋の所蔵品展Ⅰ「茶掛けの書」 会期：2026年8月28日(金)～10月18日(日) 休館日：月曜休館 ※10月12日（月・祝）は開館、10月13日（火）は休館 会場：常設展示室・展示室  左・清庵宗渭《諾》 右・沢庵宗彭《歌入文左手書軸》	
2	金		
3	土		
4	日		
5	月		
6	火	展示会内容 茶席の床の装飾として掛けられる軸、すなわち茶掛けは、一期一会のその場所で亭主の思いを代弁する第一の道具とされてきました。臨済宗開祖・栄西(1141～1215)によって日本に伝えられた茶は、その後、茶の優劣を競う闘茶として武家の間で流行していきます。室町期には広間を舞台にし、中国大陸よりもたらされた美術品や茶器を用いた豪華趣味だったものが、安土桃山期には、村田珠光・武野紹鷗を経て千利休によって茶の湯の世界が大成されました。 茶掛けでは、特に禅僧による墨蹟が重用されました。禅修行の日常においては、すべての告知・伝達事項等を一切口頭せず、墨筆文書に託する宗規があるため、それらの現物は、ことごとく寺宝として、また故人は遺品として愛蔵し、長く後世への遺産としました。これら墨蹟が後に侘びの空間にふさわしい茶道第一の道具として登場し、人々の間で珍重されてきたのです。 この展示会では、建築から作庭、茶と多彩な才能を発揮した小堀遠州(1579～1647)の消息軸や、光悦流を編み出した本阿弥光悦(1558～1637)の書状、さらに、禅僧の沢庵宗彭(1573～1645)ら鎌倉から江戸時代までの墨蹟や消息・古筆切など、茶席の掛け物として喜ばれた書と陶磁器を紹介します。	
7	水		
8	木		
9	金		
10	土		
11	日	展示会内容 茶席の床の装飾として掛けられる軸、すなわち茶掛けは、一期一会のその場所で亭主の思いを代弁する第一の道具とされてきました。臨済宗開祖・栄西(1141～1215)によって日本に伝えられた茶は、その後、茶の優劣を競う闘茶として武家の間で流行していきます。室町期には広間を舞台にし、中国大陸よりもたらされた美術品や茶器を用いた豪華趣味だったものが、安土桃山期には、村田珠光・武野紹鷗を経て千利休によって茶の湯の世界が大成されました。 茶掛けでは、特に禅僧による墨蹟が重用されました。禅修行の日常においては、すべての告知・伝達事項等を一切口頭せず、墨筆文書に託する宗規があるため、それらの現物は、ことごとく寺宝として、また故人は遺品として愛蔵し、長く後世への遺産としました。これら墨蹟が後に侘びの空間にふさわしい茶道第一の道具として登場し、人々の間で珍重されてきたのです。 この展示会では、建築から作庭、茶と多彩な才能を発揮した小堀遠州(1579～1647)の消息軸や、光悦流を編み出した本阿弥光悦(1558～1637)の書状、さらに、禅僧の沢庵宗彭(1573～1645)ら鎌倉から江戸時代までの墨蹟や消息・古筆切など、茶席の掛け物として喜ばれた書と陶磁器を紹介します。	
12	月		
13	火		
14	水		
15	木		
16	金	展示会内容 茶席の床の装飾として掛けられる軸、すなわち茶掛けは、一期一会のその場所で亭主の思いを代弁する第一の道具とされてきました。臨済宗開祖・栄西(1141～1215)によって日本に伝えられた茶は、その後、茶の優劣を競う闘茶として武家の間で流行していきます。室町期には広間を舞台にし、中国大陸よりもたらされた美術品や茶器を用いた豪華趣味だったものが、安土桃山期には、村田珠光・武野紹鷗を経て千利休によって茶の湯の世界が大成されました。 茶掛けでは、特に禅僧による墨蹟が重用されました。禅修行の日常においては、すべての告知・伝達事項等を一切口頭せず、墨筆文書に託する宗規があるため、それらの現物は、ことごとく寺宝として、また故人は遺品として愛蔵し、長く後世への遺産としました。これら墨蹟が後に侘びの空間にふさわしい茶道第一の道具として登場し、人々の間で珍重されてきたのです。 この展示会では、建築から作庭、茶と多彩な才能を発揮した小堀遠州(1579～1647)の消息軸や、光悦流を編み出した本阿弥光悦(1558～1637)の書状、さらに、禅僧の沢庵宗彭(1573～1645)ら鎌倉から江戸時代までの墨蹟や消息・古筆切など、茶席の掛け物として喜ばれた書と陶磁器を紹介します。	
17	土		
18	日		
19	月		
20	火		
21	水	展示会内容 茶席の床の装飾として掛けられる軸、すなわち茶掛けは、一期一会のその場所で亭主の思いを代弁する第一の道具とされてきました。臨済宗開祖・栄西(1141～1215)によって日本に伝えられた茶は、その後、茶の優劣を競う闘茶として武家の間で流行していきます。室町期には広間を舞台にし、中国大陸よりもたらされた美術品や茶器を用いた豪華趣味だったものが、安土桃山期には、村田珠光・武野紹鷗を経て千利休によって茶の湯の世界が大成されました。 茶掛けでは、特に禅僧による墨蹟が重用されました。禅修行の日常においては、すべての告知・伝達事項等を一切口頭せず、墨筆文書に託する宗規があるため、それらの現物は、ことごとく寺宝として、また故人は遺品として愛蔵し、長く後世への遺産としました。これら墨蹟が後に侘びの空間にふさわしい茶道第一の道具として登場し、人々の間で珍重されてきたのです。 この展示会では、建築から作庭、茶と多彩な才能を発揮した小堀遠州(1579～1647)の消息軸や、光悦流を編み出した本阿弥光悦(1558～1637)の書状、さらに、禅僧の沢庵宗彭(1573～1645)ら鎌倉から江戸時代までの墨蹟や消息・古筆切など、茶席の掛け物として喜ばれた書と陶磁器を紹介します。	
22	木		
23	金		
24	土		
25	日		
26	月	秋の所蔵品展Ⅱ 「楊守敬が来たー日本近代書人たちのまなざし」 会期：2026年10月23日(金)～12月13日(日) 休館日：月曜休館 ※11月23日（月・祝）は開館、11月24日（火）は休館。 会場：常設展示室・展示室 展示会内容 1880年(明治13)楊守敬は、大陸から今までにない数の碑法帖を携えて来日しました。楊守敬の作品を中心に彼に影響を受けた明治期の作家たちの作品を展開します。	
27	火		
28	水		
29	木		
30	金		
31	土		

沢庵さんについてもっと知ろう!その②

先月の催物案内に引き続き、沢庵宗彭(1573-1645)についてご紹介!ここでは、親しみを込めて「沢庵さん」と呼ばせてもらっています。

沢庵さんは人生の後半、江戸時代三代将軍・家光から帰依を受けることとなります。二人の間柄を記録した話はいくつかありますが、その一つをこちらでご紹介します。

家光公が沢庵さんを二の丸にある紅葉の美しい茶屋にさそい、お庭を見ている時でした。その庭の暗い場所によくできる、水たまりが話題となりました。沢庵さんは家光公に「この水たまりをいかにして直しますか?」と問いました。家光公は「砂を盛って直そう。」と言います。それに対し、沢庵さんは「砂を盛って直すのはいいですが、砂は八分に盛るのがいいですよ。あとの二分は自然と塵や芥のようなものがたまり平となるのが一番いいのです。人の身体もあまり補養に過ぎればかえって気が滞るんですよ。不調に対する治療は八分、のこり二分は自分の治癒能力にまかせるのです。」とお伝えしたそうです。その時、家光公は元気が出るような薬効のあるお薬を常用されていました。それについて沢庵さんの見解を、地を均すことを用いて説いたのでした。家光公はこの意見に深く感心され、養生の理として書きとめるようにと、仕えていた者たちに言ったとされています。

沢庵さんは安土桃山から江戸時代前期、豊臣から徳川の世となる様を見て、多くの覇者、そして敗者に出会ってきました。そんな時代の転換期を生きてきた沢庵さんの言葉には強い説得力があったように感じますね。

「書」はその筆使い、間のとり方などから、聖人たちの息づかいを感じることができる文化の一つです。墨蹟と呼ばれる作品には、それぞれの高い精神性の中で養われた感覚があります。時代を越えて味わってみてください☆シ

所蔵品展観覧料

一般	150円(120円)
高校生以下無料	

※()内は有料20名以上の団体料金

次の方は観覧料が無料です

■社会福祉施設に入所されている方（入館料観覧料減免申請書の提出が必要）

■福山市、府中市、神石高原町に住所を有する65歳以上の方
(運転免許証やマイナンバーカードなど、住所・年齢が確認できるものが必要)

■身体障がい者手帳、療育手帳、精神障がい者保健福祉手帳をお持ちの方、及びその介護者1名

※開館時間は午前9時30分から午後5時までです。

※月曜日【 の日】は休館日です。

FUKUYAMA MUSEUM OF CALLIGRAPHY

ふくやま書道美術館

〒720-0067 福山市西町二丁目4番3号
J R 福山駅福山城口(北口)から西へ約400m Tel 084-925-9222
Webページ www.city.fukuyama.hiroshima.jp/site/fukuyama-syodo/
電子メール syodo@city.fukuyama.hiroshima.jp